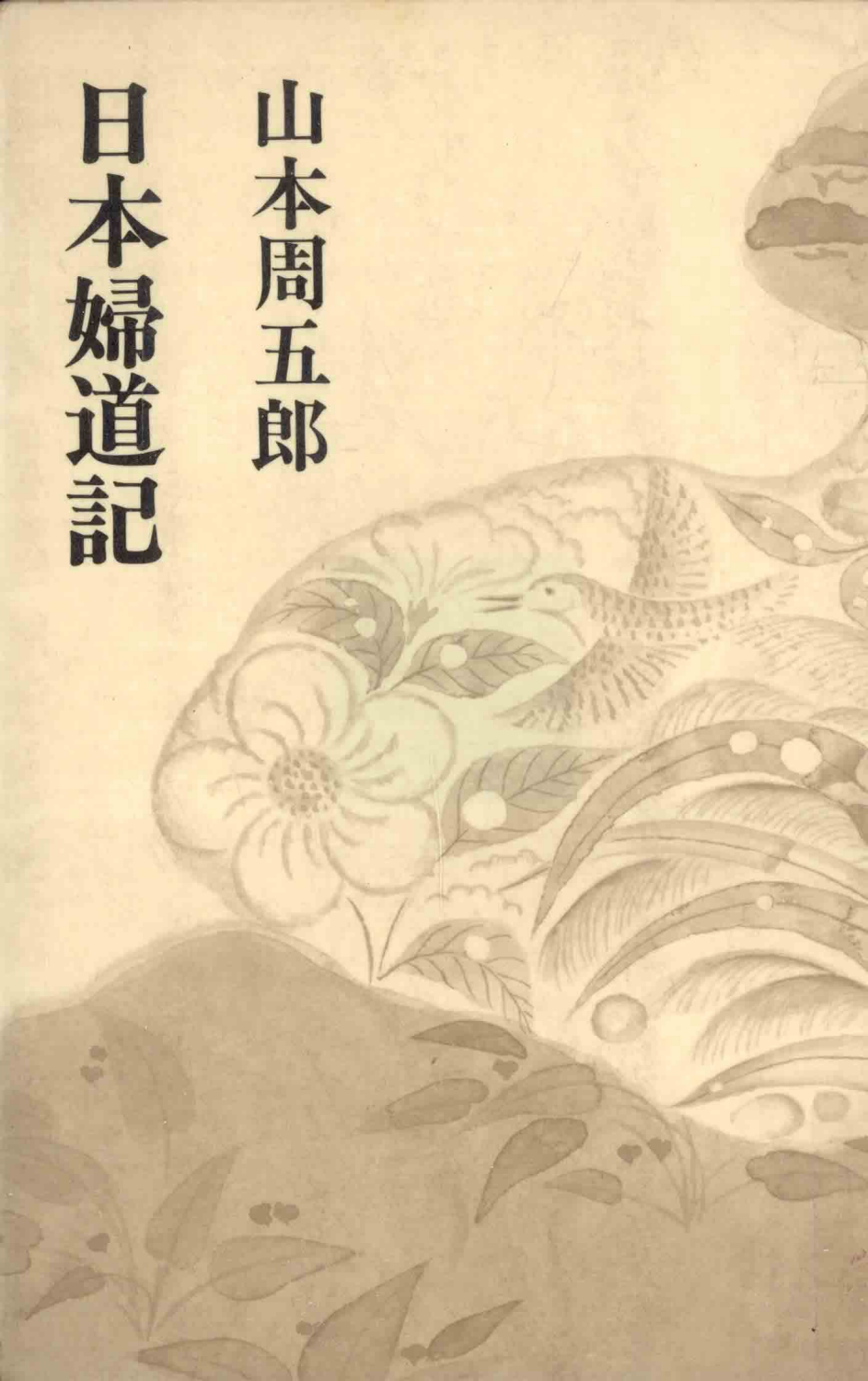
日本婦道記

山本周五郎



日本婦道記

山本周五郎

新潮社版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1968

河盛好蔵
奥野健男　監修
土岐雄三

日本婦道記（山本周五郎小説全集1）
昭和四十三年二月二十九日発行
昭和五十四年六月二十五日二十四刷
定価一一〇〇円
著者　山本周五郎
著作権者　清水きん
発行者　佐藤亮一
印刷所　三晃印刷株式会社
製本所　神田・加藤製本
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部・東京(03)二六六一五一一一
編集部・東京(03)二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

小説　日本婦道記

松の花……九
箭竹……二六
梅咲きぬ……四四
不断草……五八
藪の蔭……七五
糸車……八五
風鈴……一二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

尾花川……一三六
桃の井戸……一五〇
墨丸……一六六
二十三年……一九〇
随筆　小説の効用
Ⅰ　小説の効用……二〇九
Ⅱ　雨のみちのく……二五七
Ⅲ　暗がりの弁当……二六一

日本婦道記

小説 日本婦道記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

松の花

一

北向きの小窓のしたに机をすえて「松の花」という稿本に朱を入れていた佐野藤右衛門は、つかれをおぼえたとみえてふと朱筆をおき、めがねをはずして、両方の指でしずかに眼をさすりながら、庭のほうを見やった。窓のそとにはたくましい孟宗竹が十四五本、二三、四五とほどよくあい離れて、こまかな葉のみっしりとかさなった枝を、澄んだ朝の空気のなかにおもたげに垂れている。藤右衛門はつやつやとした竹の肌に眼をやりながら、肩から背すじへかけて綱をとおしたようなつかれの凝をかんじた。

藤右衛門は紀州徳川家の年寄役で、千石の食禄をとり、御勝手がかりという煩務をつとめとおして来た。六十四歳のきょうまで、ほとんど病気というものを知らず、いくらか髪に白いものをまじえたのと、視力がややおとろえたのを除けば壮者をしのぐ健康をもっていた。けれどもその年の春さき、老年をいたわるおぼしめしから御勝手がかりの役目を解かれ、菊の間づめで藩譜編纂のかかりを命ぜられてから、おおくは自分の屋敷の書斎にとじこもって、したやくの者たちの

書きあげてくる稿本に眼をとおすだけが仕事になり、煩雑な日常から解放されたのであるが、それ以来、かえって身すじにつかれの凝をかんじるようになった。いま机の上にひろげている稿本「松の花」は、藩譜のなかに編まれる烈女節婦の伝記と、紀州家中、古今のほまれ高き女性たちを録したものである。藤右衛門はつねづね、泰平の世には、婦道をただしくすることが、風俗を高めるこんぽんであると信じていた。それでその校閲にはもっとも念をいれ、一字一句のすえまで吟味を加えているのだが、この四五日はなんとなくつかれ易く、ともすれば惘然と筆をやすめていることが多くなった。——身にいとまのあることがかえって悪いのだろう、馴れてくればこんなことも無くなるにちがいない。藤右衛門は自分ではそう考えていた。けれどもその原因はじつはもっとほかにあった。妻のやす女がいま重態なのである。去年の夏からのわずらいがしだいに増悪するばかりで、すでに医師もみはなしていたし当人もすっかりあきらめていた、ことにゆうべはほとんど臨終かと思われ、わかれの言葉もとりかわしたほどである。病気が癌という不治のものだったので、はやくからたがいに覚悟ができていた。かなしさもつらさもいまさらのものではない。ただ臨終が平安であれと祈るほかには、藤右衛門の心はしらじらとした空虚しか残っていなかった。

竹のつやつやと青い肌を見ていた藤右衛門は、小走りにいそいで来る廊下のあしおとを聞いてわれにかえったように筆をとりあげた。

「申しあげます、父上、申しあげます」

長子格之助の声であった。

「あけてよい、なにごとだ」

「病間へおはこびください、母上のごようすが悪うございます」

「……そうか」

「すぐおはこびくださいまし」

藤右衛門は立とうとして、どういうわけか一瞬ためらい、机の上にひろげてある稿本の文字に眼をやった。なんのつもりか自分でもわからなかった。それで硯箱のありどころを直しなどして立ちあがった。渡廊下を母屋へわたり、鉤のてにまがって奥の間、中の間、内客の間とゆくと、そのあたりの廊下にはもう老若の家士たちがつめかけ、いずれも石のように息をころし頭を垂れて端坐していた。藤右衛門がはいっていったとき、妻はまさに息をひきとったところであった。長子格之助、二男金三郎、格之助の嫁なみ女、裾のほうには妻の愛していた婢頭そよもいた。みんなせきあげて泣いていた。

「まことにお安らかな、眠るような御往生でございました」

さいごの脈をとっていた医師がそう云うのを聞きながら、藤右衛門はしずかに枕許へ坐った。妻の唇にまつごの水をとってやった。もはやなにを思うこともなかった。妻の死顔はこのうえもなく安らかで、苦痛のいろなどはいささかもなかった。藤右衛門はしばらくのあいだ、祝福したいような気持で妻の面を見まもっていたが、ふと夜具のそとに手がすこしこぼれ出ているのをみつけ、それをいれてやろうとしてそっと握った。するとまだぬくみがあるとさえ思えるその手がひどく荒れてざらざらしているのに気づいた。妻の手を握るなどということはかつて無いことだった。だからいまはじめて触るように思い、その皮膚がそのように荒れているのをみつけたとき、藤右衛門はそれまでまるで知らなかった妻の一面に触れたような気がした。

「通夜は半通夜にする、通知にはそれを忘れぬよう、それぞれておちなくはからえ」

やがて彼はそう云って立った。

二

はなれの書斎へかえって、机の前へ坐ると直ぐ、彼はおちついた身がまえで校閲の筆をとりあげた。頭は冴えているし、心もしずかだった。ただひとところ、からだのどこかに蕭殺と風のふきぬけるような空隙がかんじられた。

弔問の客たちが来はじめたのはそれから一刻あまりのちのことだった。その多くは格之助が応対することで足りた、藤右衛門でなければならぬ客もくどくど悔みをのべるようなことはなかった。今日あることはみんな予期していたし、誰にもいまさらといなぐさめの言葉などはなかった。午すこしまわってから本家にあたる佐野伊右衛門が来た。伊右衛門は二千六百石の老職で、藤右衛門より二歳の年かさである。書斎へはいって来た彼は、机の上を見やりながらさすがにあきれたという顔で云った。

「このさなかに仕事か」

「なにやかや、とりこみつづきでだいぶおくれているものですから」

「いくらおくれているからと申して、今日一日をあらそうことではあるまい、それは仏にたいしても薄情というものだ」

「それでも、べつにさし当ってする仕事はなし、ぼんやりしておるのもこれでなかなかしょざいのないものです」

藤右衛門はそう云ってにが笑いをした。

「なるほど」

伊右衛門はふうと鼻をならした。

「なるほど、しょざいがないというのが本当かも知れぬ、いまさら死別がつらくて泣ける年でもなし、このように人手があまっていては用事もなしとすると、いかにもこれはしょざいがないというかたちか」

「おいそぎでなかったら一盞ととのえましょうか、わたくしはお相手がなりませんけれども、そのうちにはくらいんどがみえましょう」

森蔵人、千石の大寄合であるが蔵人がそのまま食ん人に通ずるほどの酒豪だった。伊右衛門も酒ずきではなかなかの組である、いちおう拒むようすだったが、また藤右衛門の心をおしはかったふうで、

「それでは早てまわしに、いまから通夜をはじめるとするか」

と腰をおちつけた。そのまま書斎へしたくをさせた。膳をはこぶ侍たちはみんな眼を泣き腫らしていた、それでいくらか酒脱をじまんにする伊右衛門は、給仕に坐ろうとする若侍の一人をしいてさがらせ、自分で酌をしながら呑みはじめた。間もなく森蔵人がやって来たし、そのほかにも二三人加わる者があって、暮れかかる頃までにぎやかな酒がつづいた。

半通夜ということをかたく守ったので、十時をすぎると弔問客はつぎつぎにかえっていった。そのさいごの客を見送ってから、藤右衛門は朝のままおとずれなかった病間へはいった。なきがらは型どおりに置き直されてあった。枕頭にすえられた経机には榁の枝をかざり、香のけぶりが燈明のまたたきのなかにゆれていた。伽をしていたのは格之助兄弟と家扶の六郎兵衛、用人左内、それに若侍たち四五人だった、女たちは次の間にいた。藤右衛門は香をあげ、しばらく枕頭に坐っていたが、やがてしずかに立ちあがると、

「つかれたであろう、みなよいほどにさがってやすめ、格之助と金三郎で伽をする、遠慮なくさがるがよいぞ」

そう云って部屋を出た。寝間へははいらずに、暗い廊下をふんでまた書斎へかえった。すっかり片付けられた室内に、ひっそりと燭台の火がまたたいていた。机を光に向け直して坐った、頭はやはり冴えているし、想念もおなじしずけさにあった、けれども風のふきとおるような心の空隙だけは、時を経るにしたがっておおきくなるように思えた。かなしみでもない、そういう感動はながい月日のあいだすでに飽きるほどあじわいつくして来た。いま彼の心にかようものはしらじらとした空虚の感である、からだのどこかを暗く塞いでいたものがぽかりと脱れて、そこを蕭蕭と風のふきとおるような感じがするだけだった。藤右衛門はつと手をのばして稿本をひらいた。それから硯箱の蓋をとった。けれどもそれは校閲をしようと思ったからではなく、習慣でしぜんとそうしたまでのことだった。彼はそのままながいこと空をみつめていた。かなりほど経てからのことであった、遠くから音をしのぶ人のざわめきがきこえて来たので、藤右衛門はふとわれにかえった、耳にたつほどではないが、病間のあたりでかすかに、音をしのばせた看経の声がしはじめた。藤右衛門は鈴をとって強くうち振った。

三

来たのは金三郎であった。

「お呼びでございますか」

「仏前にまだ誰ぞおるか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com